



二上山(奈良県)

ジャピック

財団法人 日本医薬情報センター(JAPIC) 2010 | No.317

JAPIC NEWS

| C | O | N | T | E | N | T | S |

■巻頭言

「ドラッグ・ラグ短縮と国際共同治験」

財団法人国際医学情報センター 理事長 相川 直樹 2

■インフォメーション

発行しました！

「添付文書記載病名集 Ver.3.0-医薬品の効能効果と対応標準病名-」..... 4

「JAPIC一般用医薬品集2011」..... 4

「JAPICJ/ジャピックジャーナルNo.15」..... 4

『JAPIC-Qサービス』で海外情報の提供を開始 5

■トピックス

「国際モダンホスピタルショー2010」出展 JAPICブースに多くの方が来場 5

JAPIC医薬品情報データベース「iyakuSearch」ファイル(1)医薬文献情報 6

■海外で承認された医薬品(12) 8

■コラム

最近の話題「内勤業務は寿命を縮める?」

日本化薬株式会社 医薬営業本部 学術情報部 関 淳一 10

会員の声「Bicycle-家族で楽しむ自転車」

株式会社三和化学研究所 安全情報管理部 都築 一弥 12

くすりの散歩道 No.39「“さるすべり”と 太宰 治」

JAPIC評議員 (前)順天堂大学浦安病院 小清水 敏昌 13

外国政府等の医薬品・医療機器等の安全性に関する規制措置情報より-(抜粋) 14

■図書館だよりNo.243 ■情報提供一覧 15

ドラッグ・ラグ短縮と 国際共同治験

財団法人国際医学情報センター 理事長
慶應義塾大学名誉教授
JAPIC評議員 相川 直樹 (Aikawa Naoki)



外国で承認されている医薬品が我が国で使用できない問題が、最新の医療を追及している医師達のみならず、患者団体や一般市民からも指摘されるようになって久しい。新薬が外国で承認されてから、我が国で承認されるまでかなりの年月がかかるドラッグ・ラグの要因となっている新薬の審査期間を、欧米並みに短縮するために、独立行政法人医薬品医療機器総合機構 (PMDA) の職員が増員され、外部専門委員のパネルも充実されてきた。

ドラッグ・ラグのもうひとつの要因として、我が国では臨床治験に長期間かかることがある。これには、治験参加施設の選択時に、それぞれの施設の治験環境とともに、その施設が扱う対象症例数を調べてから決める必要がある。

昔は、治験を取り纏める大御所の天の声で、治験参加施設が選ばれたことも多かったが、一例も組み入れられない施設もあった。治験対象疾患に関連する学会の理事の施設や、大学病院が必ずしも多くの症例を組み入れられるとは限らないが、大御所には、これらの施設を無視できない理由があるのかもしれない。

私がかかわっている集中治療を要する重症感染症に対する抗サイトカイン薬などの生体反応制御の薬剤の治験では、市中肺炎、院内肺炎、腹腔内感染症、尿路感染症、手術後・外傷後感染症など様々な感染症から進展する severe sepsis が対象となるので、患者を担当する診療科が多岐に亘り、診療科講座の壁が強固な大学病院では、教授の意向もあって症例組み入れは簡単ではない。

かつては、国立の施設に治験依頼をすると、依頼時に目標症例数に見合っただけで納入した治験費用が、組み入れ

症例がなくても返金されないという、詐欺紛いの慣習もあった。今では、大御所が治験を統括したり医学専門家になれば、治験が上手くいくとは限らないことを製薬会社は知っており、治験のインフラストラクチャーが整備され、過去の同類の治験で良質の症例を組み入れてきた施設の情報を分析して治験施設を厳選するようになった。治験に巨額の投資をしてリスクを負う製薬会社としては当然のことである。

ドラッグ・ラグの解決手段としては、臨床第Ⅱ相から国際共同治験への参加がある。残念ながら、我が国は大きなマーケットを有しているながらも、長いこと国際共同治験の蚊帳の外にいた。医薬品の有効性や安全性には、民族的要因 (ethnic factors) が影響することから、欧米の製薬会社は、欧米の共同治験に日本を最初から加えることを避けてきたのだと思う。頭髪は皆黒く肥満者の少ない Mongoloid からなる国で、国民皆保険で安価な医療が行われている長寿国とは、内的民族的要因も外的民族的要因も欧米諸国と異なるのは確かである。

しかし、日本のマーケット規模も無視はできず、新薬提供の倫理的義務からも、日本を蚊帳の中に入れようとする流れが出てきたのはよいことだ。PMDA に平成 20 年度に提出された治験計画届 523 件のうち 82 件 (15.6%) が国際共同治験とのことで、国際共同治験は年々増加している。

約 15 年ほど前から、私も欧米企業が開発しているいくつかの薬剤の治験計画段階からお仕事を頼まれてきた。欧米で開始された第Ⅱ相試験の追っかけ治験を日本で

行い、第Ⅲ相試験で国際共同試験に合流する計画に関して、日本の試験環境と審査環境ならびに内的・外的民族的要因に関するアドバイスと資料提供が主な仕事となっている。この点では、まだまだ日本は欧米従属のレベルである。

しかし最近になって、私の領域でも、日本のメジャーが日本を含む国際共同試験で自社の薬剤を開発するようになった。

一つは、武田薬品工業が開発したToll-like receptor-4拮抗薬の試験でTriangle Studyと言われる。日米欧の「三極」と武田のロゴの「三つ鱗」とからTriangleと命名したらしい。この薬剤の試験では、生存率では良い傾向がみられたが、バイオマーカーのエンドポイントが目標を下回ったため、Data and Safety Monitoring Boardの判断を受けて、残念ながら中止となった(Crit Care Med 2010;38:1749)。

現在進行中の国際共同試験はエーザイのEritoranがあり、その他、いくつかの日本発の薬剤が国際共同試験として計画されている。これらの国際共同試験にmedical advisorやsteering committee、clinical evaluation committeeなどの日本人メンバーとして関わってきたが、様々な体験をし、学ぶことも多かった。

Triangle Studyでは、武田の優秀な研究者と開発のコンセプトから議論をした。第Ⅱ相試験計画の詳細を決めるために、この分野の臨床試験の経験豊富な欧米医師をノミネートして、シカゴで最初の会議を持ったのが2000年であった。当時は、日本の会社が依頼する国際共同試験で北米と欧州の専門家を一同に会した会議を開くことは、参加承諾から日程調整を含めかなり困難であった。欧米人の日程を優先するために、私の日程は犠牲にして、沖縄サミットの救急医療計画会議があった沖縄からシカゴに直行したことを覚えている。欧米人、特にメンバーの多い米国人が集まりやすい会議場とするために、ハブ空港であるシカゴ・オヘア空港と地下道で繋がっているヒルトンとした。寝泊りの部屋と多くの会議室以外には大した設備のない殺風景なホテルである。

資料をしっかり準備して、前もってagendaとともに資料を送っておけば、会議はせいぜい4~5時間で目的を達する。このような会議で日本が会議をリードするには、忌憚のない正確な討論ができる英会話力はもとより、薬剤と対象病態の深い理解と、欧米の医療現場に関する知

識とが求められるのは当然である。議論において相手の言うことに同調しがちな日本人が多いが、安易に同調、妥協しないで、相手の言っていることをきっぱり(かつ丁寧に)否定しても、自分の考えを主張する姿勢がないと後で後悔するのだが、さすが日本のトップ製薬企業、武田の開発担当者はしっかりと目的を達した。

参加者は皆多忙なので、午後から夕方までの会議で実質的な議論をして、決めるべきことは決めて、そのまま散会。時間の余裕のある人は夕食会に参加という、まさに実務会議である。このようなface-to-face meetingは頻繁に開けないため、その後の意見交換には、tele-conferenceが威力を発揮する。

しかし、今までは欧米でやっていたtele-conferenceに極東に位置する日本が加わると、時差が一層厄介となる。日本はGMT(グリニッジ標準時)+9と言っても米国人は混乱するばかり。つまらない間違いを避けるためには、米国東部時間の日時に通知するのがよい。米国や欧州各国の祝祭日も考慮に入れることは当然だが、野蛮な働き蜂の日本人と思われたいためには、Thanksgiving(米国11月とカナダ10月で日が異なる)やEasterの前後には日程を入れないほうが良い。これだけの注意をしても、フランス人などは長い夏休みをとるので、夏はなかなか日程確保ができず仕事が進まない。会議では遠慮なく自分の意見を主張することにしているが、tele-conferenceの日時調整となると、極東の引け目で遠慮してしまい、日本時間の早朝か深夜となってしまふ。

tele-conferenceのもう一つの問題は、会話の正確性である。face-to-face meetingと違い、話し手の身振りが見えず、特に発音時の口唇や舌の形が見えないために、会話が聞き取りにくいことがある。当然、私の日本人なまりの英語も、欧米人にとって聞きにくくなっていると思う。

会議では医療事情についての議論も多い。日本固有の治療や日本にない薬剤など、日本の臨床現場についてしっかり説明できる知識とともに、欧米の臨床現場の実情もある程度知っていないと議論に入れない。米国の医師や看護師が頻繁に使う医療用語の略語やjargonにも精通していないと苦勞する。

このようなハードルを越えながら、日本発の薬剤が国際共同試験のテーブルに載って、迅速かつ円滑に世界のマーケットに出ていく日もそう遠くないと思っている。

発行しました！

(1) 「添付文書記載病名集 Ver.3.0－医薬品の効能効果と対応標準病名－」

今回のVer.3.0では、ICD10コードの上2桁が一致している病名、病名の一部が一致するものを候補病名として抽出し、対応標準病名を更に充実させました。前版までと同様に複数の専門医師及び薬剤師によって評価を行いました。

《収録内容》

- ◇2010年4月までにJAPICで入手した添付文書、及び2010年5月薬価収載の後発品
- ◇付録として2010年6月薬価収載の新薬 ◇2010年4月時点での薬価
- ◇ICD10対応標準病名マスター：Ver.2.90 (MEDIS-DC提供、2010年6月更新情報)
- ◇厚生労働省保健局医療課長通知「医薬品の適応外使用に係る保険診療上の取扱いについて」(保医発第0921001号)による内容

《価格》 ¥7,770 (税込)

(2) 「JAPIC一般用医薬品集2011」

改正薬事法により、販売制度が大きく改められた一般用医薬品。リスク区分を各製品について掲載するなど、改正薬事法に対応した一冊です。

《特長》

- ◇国内流通の一般用医薬品、約12,000製品を収録 (2010年7月までの一般用医薬品情報を収録)
- ◇最新の添付文書を日本製薬団体連合会の委託を受け収集。国内流通の一般用医薬品をほぼ全て網羅
- ◇各製品の組成・効能効果・用法用量を掲載すると共に、薬効ごとの「使用上の注意記載要領」を記載し、更に新一般用医薬品などの「使用上の注意」を収録して添付文書記載内容を網羅するよう編集
- ◇一般用医薬品販売に必須情報である、医薬品製品ごとのリスク区分を本文 (製品説明部分) 及び50音索引に掲載。探している医薬品のリスク区分がすぐに判ります。また第一類医薬品のみを集めた索引に製造販売会社などの情報を付加した第一類医薬品索引を収録
- ◇付録として一般用医薬品のリスク区分一覧 (成分)・ブランド名別成分比較表を収録

《価格》 ¥9,450 (税込)

(3) 「JAPICJ/ジャピックジャーナルNo.15」

2010年6月末にNo.15を発行しました。本誌の内容は昨年から今年にかけてJAPICで開催した薬事研究会、医薬情報講座、ユーザ会等の講演内容から主要なものを選び、まとめたものです。

(会員の皆様にはすでにお送りしておりますが、ご希望の方には贈呈いたしますので必要部数をご連絡ください。)

◆目次

医薬品情報：時の動き

医薬品を取巻く環境と情報の役割

折井 孝男 (NTT東日本関東病院 薬剤部長)

新しい薬学教育体制が順調に進行中

望月 正隆 (東京理科大学薬学部教授)

ペット医療の世界を垣間見て

原 満良 (万有製薬株式会社臨床医薬研究所)

感染制御専門薬剤師として 田中 昌代 (NTT東日本関東病院・薬剤部)

「医薬品と対応病名データベース」の価値

松本 武浩 (長崎大学病院医療情報部准教授/副部長)

「医薬品と対応病名データベース」の大学病院情報システムへの導入と効果

中島 直樹 (九州大学病院医療情報部 准教授)

外国製造業者とGMP調査－製造販売業者の立場から

田中 智英 (エーザイ株式会社信頼性保証本部)

医薬品の安全対策と最近の話題

佐藤 大作 (厚生労働省医薬食品局安全対策課)

米国大規模有害事象症例報告データベース (AERS) を活用した情報サービス

日野村 靖 (財団法人日本医薬情報センター開発企画担当)

《お問合せ先》 事務局 業務・渉外担当 (TEL:0120-181-276)

『JAPIC-Qサービス』で海外情報の提供を開始

「医薬文献・学会情報速報 (JAPIC-Q) サービス」では1993年のサービス開始以来、国内発行の雑誌および国内開催の学会を対象に医薬品の有効性・安全性・品質についての情報を提供していますが、2010年度から範囲を拡大し、ご希望のユーザーには海外文献情報についても提供を開始します。

- ソース：「JAPIC Pharma Report 海外医薬情報」に掲載された
 1. 海外の主要医学雑誌および副作用資料からの安全性情報・有効性情報
 2. 医薬文献データベースPubMedからの安全性情報
- 提供内容：予めご登録いただいた医薬品名での検索結果（書誌事項とキーワード）
- 提供頻度：月1回
- 提供形態：「書誌キーワードテキストCD-ROM」または「書誌キーワードテキストe-mail」
- 対象：JAPIC-Qサービスご利用者限定、海外情報の入手ご希望のユーザー様
- 開始：10月から
- お問合せ先：医薬文献情報JAPIC-Qサービス担当
TEL：03-5466-1821（直） e-mail：japic-q@japic.or.jp

トピックス TOPICS

「国際モダンホスピタルショー2010」出展 JAPICブースに多くの方が来場

2010年7月14日から16日まで3日間東京ビッグサイト（有明 東京国際展示場）東ホールで開催された国際モダンホスピタルショーには341社が出展しJAPICも出展しました。

医療機器関連、看護・介護リハビリ関連、医療情報システム関連、病院・施設運営サポート関連などについての各社の出展があり、3日間で79,150人が来場したということです。JAPICは医療情報システムゾーンに出展しましたが、このゾーンには電子カルテシステムが30社以上、医用画像システムなどが14社以上と、活発な出展と実演がありました。JAPICは昨年



に引き続き「医薬品と対応病名検索システム：インターネットによる“病名ナビ”」を中心に展示紹介しました。多くの方々にブースに立ち寄っていただき、出版物をはじめ情報提供内容についてさまざまなご質問やご意見をいただきました。病名検索システムについては特に熱心なご質問や導入検討をいただき昨年に増して関心の高さを実感しました。

❖ JAPICサービスの紹介 ❖

■ JAPIC医薬品情報データベース「iyakuSearch」 ファイル(1) 医薬文献情報

JAPIC医薬品情報データベース「iyakuSearch」はJAPICのホームページから誰もが無料でアクセスできるデータベースです。現在9ファイルが公開されています。今月号より「iyakuSearch」で提供している各ファイルについてご紹介していきます。第1回は医薬文献情報です。

○ 概要・特長

医学・薬学関連文献から医薬品の有効性、安全性、品質等に関する情報を蓄積したデータベースです。

- ◆1983年現在まで約37万件を収録し、年間約17,000件、月約1,400件（原著約900件、総説約500件）のデータを追加
- ◆ソースである採択雑誌数は国内407誌および海外13誌
- ◆書誌的事項（標題・著者名・所属機関・雑誌名等）がデータとして閲覧可能
- ◆著者全員についての著者名および所属機関を収録
- ◆医薬品名、著者名、所属機関、雑誌名等からの検索が可能
- ◆データ更新は月1回

< 医薬文献情報検索画面 >

医薬品情報データベース ゲストユーザー様 医薬サーチの使い方 FAQ お問い合わせ

iyakuSearch

検索トップ 検索履歴 書き込みBOX

>> 検索画面 検索結果一覧 結果詳細画面

医薬文献・学会演題 添付文書

検索語を直接入力してください。 [-iyakuSearchの使い方]

J200807490 *(AND) *(OR) *(NOT) 及びO括弧が利用できます。
著者名(漢者名) 所属機関も入力可能です。
例: 血栓症 * 医薬太郎

医薬文献DBから検索 学会演題DBから検索 すべてのDBから検索

年月指定 [] [] ~ 2010 [8] 最新更新分を検索する 副作用 副作用の記述のあるもの

記事種類 原著 総説 欧文(国内文献) 海外文献 対象 ヒ 動物

検索 新規検索 読み込み項目をリセットする

エキスパート検索 入力支援項目(医薬品、薬効分類等)を利用した詳細な検索ができます。



< 医薬文献情報検索結果画面 >

検索結果表示 1件該当

10件表示 新しい順 << ページ 1 / 1 >> ページ >>

必要な情報を選択(チェック)してから、ボタンを押してください。

全て選択 全ての選択を消す 印刷表示 書き込みBOXへ追加 検索語を登録しない

<input type="checkbox"/>	[No.]抄録番号	J200807490	抄録(ユーザ登録が必要)
	標題	Netherton症候群の成人例: An adult case of Netherton syndrome	
	著者名・所属	O Δ O O (O O 大学大学院 O O 研究部 O O 講座 O Δ 科学), O O O, O O O O (O O 病院 Δ O 科)	
	雑誌名	F07/臨床 O O / ISSN O Δ Δ Δ O 62(7)438-441 / (2008.6)	

全て選択 全ての選択を消す 印刷表示 書き込みBOXへ追加 ▲ ページ最上へ

<< ページ 1 / 1 >> ページ >>

iyakuSearchでは、「医薬文献情報」で提供する標題・著者名等の書誌情報に加え、キーワード・抄録情報も閲覧いただける「医薬文献情報プラス」を提供しています!!

<医薬文献情報プラス検索結果画面>

抄録番号	J200807490
標題	Netherton症候群の成人例; An adult case of Netherton syndrome
著者名・所属	〇〇〇(〇〇大学大学院△〇研究部〇〇講座〇△科学), 〇〇〇, 〇〇〇〇(〇〇病院△〇科)
雑誌名	R07/臨床〇〇 / (ISSN: △ △) 〇 62(7)438-441 / (2008.6)
参考文献数	9
抄録	【概要】Netherton症候群(NSX)の成人例の報告。【症例】28歳男性。【既往歴】栄養不良、痙攣(乳児期)、停留嚥丸(3歳時)繰り返す皮膚表在感染と熱発(幼少期)、結膜炎、花粉症。【家族歴】血族結婚歴、NSなし。【経過】下時より再発。本例で、病があり効る要因は、ステロイド軟膏の悪い使用、皮膚を長時間着用していたことが考えられた。治療は対症療法とスキンケアも含めた生活指導が中心となるが、将来的にはプロテアーゼインヒビターの治療薬が期待される。(第126回日本皮膚科学会徳島地方会、第71回日本皮膚科学会東部支部学術大会)
医薬品名 一般名 会社名 薬効【薬効補足】	corticosteroids (副腎皮質ホルモン剤), (264) 鎮痛, 鎮痒, 収斂, 消炎剤 [副腎皮質ホルモン剤] V.D3 (ビタミンD3), colecalciferol (コレカルシフェロール), (269) その他の外用薬 moisturizing-agents (保湿剤), [moisturizing-agents (保湿剤)], (266) 皮膚軟化剤(保湿しよく剤を含む)
剤形	軟膏剤
投与経路	皮膚投与
疾病	魚鱗癬 (Netherton症候群)
副作用	副腎不全 (血漿コルチゾール低下) [corticosteroids]
器官別副作用	内分泌障害 [corticosteroids]
医薬文献キーワード	ADVERSE, 副作用, 安全性, 抄録, human, ヒト, 臨床, 症例報告, 用法用量, 長期投与

一覧に戻る 印刷表示 複写BOX追加

▲ページ最上部へ

医薬文献情報プラス

○ 概要・特長

「医薬文献情報」にキーワード・抄録の情報をプラスしてご覧いただけます。

- ◆書誌的事項として標題、著者名、所属機関、雑誌名等を収録
- ◆キーワードとして医薬品名(一般名、会社名、薬効分類)、剤形、投与経路、疾病名、副作用症状名、内容に関連したキーワードを収録
- ◆原著文献には900文字程度の和文抄録(目的・方法・結果等、項目立てしてあります)を収録
- ◆総説文献には副見出しを収録
- ◆書誌的事項・上記キーワードからと、抄録・副見出しの全文からの検索が可能
- ◆2008年4月より、JST(独立行政法人科学技術振興機構)提供のJ-STAGEにリンクされ、電子ジャーナル(無料)が参照可能
- ◆データ更新は月1回

☒ ご利用方法 ☒

利用者登録が必要です。JAPIC維持会員機関に所属されている方は、無料でユーザIDとパスワードを発行します。iyakuSearchトップ画面右下の「利用者登録」をクリックしていただき、表示されるメンバー登録申し込みページに必要事項を記入してお申し込み下さい。
非会員の方も、10,000円/年(税込)にて利用者登録の上、ご利用いただけます。

海外で承認された医薬品 (12)

JAPICでは、医薬品の有効性・安全性・規制・承認に関する海外の情報を収集し、各種媒体で提供を行っております。本シリーズでは、海外で承認された医薬品のうち、米国、EUにおける新有効成分 (New Molecular Entity: NME) 医薬品を中心に随時紹介します。

◆米国：閉経後骨粗鬆症治療薬Prolia (denosumab) 承認 承認日：2010年6月1日

米国FDAは、Amgen Manufacturing Ltd. のProlia (denosumab) を承認した。Prolia の活性成分denosumabは抗RANKL (receptor activator of NF κ B ligand) 完全ヒト化モノクローナル抗体である。骨折リスクの高い閉経後女性の骨粗鬆症の治療に使用される。Proliaは骨の破壊を減少させ、骨量および強度を増大させる。プレフィルドシリンジの注射剤で、denosumab 60mg/mlを含有する。6ヵ月に1回、上腕、大腿上部または腹部に皮下注射する。

Proliaの閉経後骨粗鬆症の治療における安全性と有効性は、3年間の無作為化二重盲検比較試験において、7808例の閉経後女性 (60~91才) を対象に実施された。6ヵ月に1回、Prolia 60mgまたはプラセボのいずれかを皮下注射し、全例にcalcium 1000mg/日、少なくとも400 IU/日のvitamin D補給剤を投与した。

Proliaは、骨粗鬆症の閉経後女性において、有効性主要変数の脊椎骨折を減少させ (3年時の新規発生率：プラセボ群7.2%、Prolia群2.3%)、副変数の脊椎以外の骨折および股関節部骨折の発生率も減少させた。

Proliaにより報告された最も一般的な副作用は、背部痛、四肢の疼痛、筋骨格疼痛、高コレステロール血症、膀胱炎などであった。重篤な副作用には、低カルシウム血症、皮膚の感染症を含む重症感染症、皮膚炎、発疹、湿疹のような皮膚反応が含まれた。Proliaは骨代謝回転の有意な抑制を生じ、その抑制が顎骨壊死の発生、非定型骨折、骨折治癒遅延の一因になる可能性がある。

ProliaはREMS (リスク評価・リスク緩和戦略) が要請され承認された (患者向けMedication Guide、医療提供者向けCommunication Planなど)。

EUでは、閉経後骨粗鬆症の治療ならびにホルモン除去療法中の前立腺癌患者における骨量減少の治療に対して承認された。

(EU: 2010年5月26日承認、国内: Phase III)

◆米国：進行前立腺癌治療薬Jevtana (cabazitaxel) 承認 承認日：2010年6月17日

米国FDAは、Sanofi AventisのJevtana (cabazitaxel) を承認した。Jevtanaの活性成分cabazitaxelは微小管阻害剤である。進行前立腺癌患者の治療にprednisoloneとの併用により使用される。Jevtanaは、docetaxelによる治療中または治療後に進行したホルモン不応性転移性前立腺癌患者に対する治療として初めてとなる。2010年4月にpriority reviewの対象に指定されていた。cabazitaxel 60mg/1.5mlを含有する注射剤で、静脈内注入用である。

Jevtanaの安全性と有効性は、無作為化多施設オープン試験において、docetaxel含有治療を以前に受けていたホルモン不応性転移性前立腺癌患者755例を対象に実施された。Jevtana 25mg/m²を3週ごとに最大10コース静脈内投与またはmitoxantrone 12mg/m²を3週ごとに最大10コース静脈内投与し、いずれもprednisolone 10mg/日経口投与を併用した。Intent-to-treat解析により、全生存期間の中央値はJevtana群で15.1ヵ月、



mitoxantrone群では12.7ヵ月であった。

Jevtanaによる一般的な副作用は好中球減少、貧血、白血球減少、血小板減少、下痢、疲労感、嘔気、嘔吐、便秘、脱力、腎不全であった。枠囲み警告として好中球減少性死亡、重度の過敏症が記載された。

前立腺癌は、米国では皮膚癌に次いで二番目に多い癌である。CDCによると2006年には203,415例が前立腺癌に罹患し、28,372例が死亡している。

(EU:申請中、国内:前臨床)

**◆EU:慢性閉塞性肺疾患治療薬Daxas
(roflumilast) 承認
承認日:2010年7月5日**

EU・EMAは、Nycomed GmbHのDaxas (roflumilast) を承認した。Daxasの活性成分roflumilastはホスホジエステラーゼPDE IV阻害剤である。慢性閉塞性肺疾患 (COPD) の治療に使用される。Daxasは500 μ gの錠剤で、推奨用量は1錠を1日1回。

Daxasの有効性の検討は、2つの主要な試験において、過去1年間にCOPDが1回以上再燃した重度の成人COPD患者3000例を対象に実施された。主要評価項目はFEV₁の改善、および治療1年にわたるCOPDの中等度から重度の再燃数の減少であった。DaxasはCOPDの治療においてプラセボよりも有効で、治療1年後FEV₁が平均40ml増加し、これに対してプラセボでは平均9mlの減少であった。さらに、疾患の中等度から重度の再燃数もプラセボに比べてDaxasにより減少した。

Daxasの最も一般的な副作用は、体重減少、食欲減退、不眠、頭痛、下痢、嘔気、腹痛であった。Daxasは、roflumilastまたは他の成分に対して過敏症 (アレルギー) のおそれがある患者には使用すべきでない。中等度から重度の肝障害を有する患者には使用しないこと。免疫系が重度に低下している患者には推奨されない。また、自殺念慮を有する抑うつ患者に対しても推奨されない。

(米国:申請中、国内:Phase III)

出典:FDA News Release、Drugs@FDA、EMA European Public Assessment Report (EPAR) など
(医薬文献情報担当・海外)



最近の話題

内勤業務は寿命を縮める？

日本化薬株式会社 医薬営業本部 学術情報部
医薬品情報センター 関 淳一 (Seki Jun-ichi)



「少しでも運動をしたほうがいいですね」

日頃から体を動かす習慣を身につけることが内臓脂肪を増やさないためには大事と、健康診断指導のたびに定期的な運動を勧められますがなかなか実現は難しいもの。検診制度として2008年4月から始まったメタボリックシンドローム判定。幸いにも定期健康診断では2年連続で「非該当」との通知を受けていますが、生活は変わらないのに体重が少しずつ増えはじめ、最近では加齢による基礎代謝の低下を確かに実感しています。そこで、食生活の改善、スポーツクラブへの入会、帰宅後や週末のジョギングなど、今後の生活や仕事に何かの対策を立てなければ!との思いを強くしたことがありました。

テレビの飲料水のコマーシャルで、腹囲を測るときだけ息をつめる俳優の姿に自分を重ねると、日々の運動不足は精神的にも良くありません。週末のジョギングでは肉離れを起こしたこともあり(悲惨!)、厚生労働省が2006年に出した「健康づくりのための運動指針」の身体活動量の目安を目指して、ささやかな対策として1万歩/1日を目標に万歩計を身につけるようにはなりました。

私は製薬会社のくすり相談窓口勤務しています。部署名は、学術情報部 医薬品情報センターといえます。医療関係者、医療消費者の皆様や、社員(MR)からの医療用医薬品の様々な問合せについて主に電話で日々応対しています。販売製品の構成から、がん関連の問い合わせを多くいただきます。ヘッドセットを口元にして机に向かっていることの多い典型的な内勤業務です。

万歩計を身につけると歩数をよくチェックするようになり、不思議なものでおしなべて一日に1万歩程度は歩くようになりました。

ところが最近、内勤業務と運動についてショッキングな配信記事を見つけました。7月24日付けの「New York Post」です。ACS(American Cancer Society:がん患者の支援協会)の14年間に渡る12万人以上のアメリカ人の調査結果を掲載していました。1日6時間以上「座りっぱなし」で仕事をしている女性は、3時間以上の人と比べて37%も死亡率が高く、更に前者で全く運動をしない女

性では、死亡率が94%増というのです。男性の場合、同じように座り続けても死亡率は女性ほど高くなく、6時間以上で18%増、更に運動しない場合は48%増ということです。

男性の相関が低い理由は明確ではないようですが、この報告では、「仕事の後の運動だけでなく、仕事でも定期的に立ち上がり、歩いたりストレッチしたりして体を動かすことが大切」と結んでいます。同じ施設内であれば他部署へは内線電話でなく場合によっては直接会いに行く事を心がけると健康にも良いし、コミュニケーションとして仕事にも良いかもしれません(相手への中座対策として伝言メモを持っていく必要があります)。この記事では肥満防止のためにも仕事中でも体を動かすことを勧めていますが、「特に内勤業務では工作中、仕事外を問わずに適度に体を動かすことが大事」と考えてよいと思います。

ウォーキングは思い立ったときに手軽にできる有酸素運動のひとつです。適度な有酸素運動が様々な面で、健康に良い影響を与えていると言われています。例えば、有酸素運動は心肺機能を改善し、脂肪の消費により冠動脈疾患の危険性を減少させ、慢性疾患(高血圧や2型糖尿病)の発症を低下させます。このようなことをイメージすれば「今日は一駅分は歩こう。」と新たな運動の時間を作ることもできるのでないかと思います。

更にはウォーキングをするだけで、がん予防にもなるというのだとしたら、もっとモチベーションがあがること間違いなし。さまざまながん腫で標準治療が確立し始めたとはいえ、「がん」は生命予後に直結する疾患のひとつです。

ここではウォーキングと「がん予防」について紹介したいと思います。

アメリカがん研究財団と世界がん研究基金が1997年にがん予防の14か条を発表しています。有名な条文と思いますが、その第3条に「運動の維持」が次のように謳われています。

1. 食物繊維を中心とした食事
2. 肥満を避ける
3. 運動の維持(1日全部で1時間)
4. 野菜、果物を1日400~800g摂る
5. 穀物、芋、豆を1日600~800g摂る
6. お酒は適量
7. 赤身の肉は、1日80g
8. 脂肪は控える
9. 塩分は控える(1日6g以下)
10. カビ毒に注意
11. 食品は腐らせないように冷蔵庫に保存
12. 食品添加物や残留農薬に注意
13. 黒こげのものは食べない
14. 栄養補助食品に頼らない

国立がん研究センターのがん対策情報センターのホームページでは、身体活動が結腸がんや乳がんなどのリスクを下げる要因のひとつとして取り上げられています。また、身体活動と「がん」については、1999年の日本の報告があります。最大下運動負荷テストを受診した健康な男性9,986人についての調査です(文献1)。このテストで判る有酸素能力は身体活動量を評価する客観的な指標のひとつとされているので、わかり易く結果をまとめると、運動の程度によって5つのグループに分け、平均15年間に渡って調査したところ、がん死亡率は、運動不足グループが最も高く、平均運動量グループの2倍以上、積極的に運動しているグループの4倍近いと報告しています。

どの程度有酸素運動をすれば、例えば、1日どれくらいの距離を歩けば「がん」の予防といえるのでしょうか。1998年に61~81歳の707人の日系人を対象とした1日の歩行距離とがん死亡を検討したコホート研究によれば、1マイル(約1,600メートル)未満の歩行よりは1マイル以上の歩行の方が、「がん」で死亡する可能性が低いと報告しています(文献2)。私の目標の毎日1万歩(7,400メートル)は、「がん予防」の点ではまだ十分でないのかもしれませんが。

有酸素運動が「がん」発生のリスクを抑える理由について興味を持ち、少し調べてみました。

欧州の研究グループは、21の研究報告をまとめ、3,609人の患者と7,137人の健常者の血中のインスリン様成長因子-1(IGF-1)とインスリン様成長因子結合蛋白質-3(IGFBP-3)のデータから、前立腺がん、大腸がん、閉

経前および閉経後乳癌、肺癌の発症リスクとの関連を2004年に報告しています(文献3)。この報告によれば血中のIGF-1の濃度が高いと前立腺がんと閉経前の乳がんになるリスクが高く、血中のIGFBP-3の濃度が高いと閉経後乳がんになるリスクが高いといえます。その他のがんでは相関関係は見出せなかったとのこと。同様な疫学報告はここ10年の間に、米国や欧州で散見されるようになりました。

インスリンはすい臓のランゲルハンス島から分泌され、血糖値維持に重要なホルモンであることはよく知られています。成長因子であるIGF-1はインスリンとそのアミノ酸配列が似ている蛋白質のひとつですし、IGFBP-3はIGF-1に結合する蛋白質のひとつです。2つの蛋白質にはインスリン様作用のほか、細胞の増殖を調節する作用があることが判っています。また、IGF-1には、前立腺がん細胞や、乳癌細胞の増殖を刺激する作用もあるといいます。

IGF-1やIGFBP-3の血中濃度が高いと、がん発症のリスクが高まるのがこのように報告されてきた中で、昨年にウォーキングに関連した報告がありました。名古屋大学の研究グループは49~79歳の日本の3,598人の男性と3,359人の女性にアンケートと血液検査を実施したところ、男女共に、年齢とBMI(Body Mass Index)で補正した血清中のIGF-1とIGFBP-3は、より長くウォーキングした人ほど、明らかに低いと報告しました(文献4)。この報告では、ウォーキングなどの身体活動がいくつかの「がんの予防」に役立つ説明のひとつになると結論しています。

なぜ、運動すると、IGF-1やIGFBP-3の血中濃度が低下するのでしょうか? IGFはその構造がインスリンと似ていること、そしてインスリン感受性やインスリン抵抗性と身体活動との関連がヒントとなりそうですが、今後の検討が待たれるところです。

内勤業務中の細切れウォーキングも、塵も積もれば…と考え実行したいと思います。今年は例年になく暑い夏でしたが、これから運動のしやすい季節になります。いくつかの「がん」に対してウォーキングが予防的に働く様子をイメージして、しっかりとウォーキングをしてみるのも良いのではないのでしょうか。

■文献

1. 日本公衆衛生雑誌1999, vol.46 p.113-119
2. 日本臨床 2000, vol.58(増刊) p.320-324
3. Lancet 2004, vol.363(9418) p.1346-1353
4. Asian Pacific J Cancer Prev 2009, vol.10 p.23-27

会員の声



Bicycle—家族で楽しむ自転車

株式会社三和化学研究所 安全情報管理部
都築 一弥 (Tsuzuki Ichiya)

(株)三和化学研究所はスズケングループの一員として、昭和28年に製薬会社として創業を開始しました。本社は今年、開府400年を迎えた名古屋市にあります。当社は「糖尿病治療のベストパートナー企業」を目指し、セイブル錠に代表される医療用医薬品や、グルテストシリーズなどの診断用医薬品、医療用食品を適正使用していただくための情報活動を展開しています。

私は入社当初、学術部門に配属され、本社、福岡支店勤務を経て、現在のPMS部門に配属されました。支店学術をしていた当時、待望の新薬販売開始直後に重篤な副作用が発生したとの連絡を受け、その対応方法について本社に問い合わせたことが、「安全性」について強く意識するきっかけとなりました。PMS部門に配属されてからは、「医薬品医療機器情報提供ホームページ」のシステム立ち上げ時に、メーカー側の検討プロジェクトに参加し、掲載する添付文書情報ファイルの作成方法や、情報の提供方法について考え検討する経験ができました。この経験がこれからの業務に大いに役立つこととなりました。

担当業務は主に情報伝達で、使用上の注意改訂の際のスケジュール調整、DSUへの掲載手続き、「お知らせ文書」の作成、ダイレクトメールの発送手配などを行っています。これまでJAPICとの係わりは、問い合わせ対応時にiyakuSearchを利用してきた程度でしたが（ただし相当頼りにしております）、この4月から外国措置情報の収集業務を担当することになり、JAPIC Daily Mailを日々チェックすることになりました。

私は、最近、趣味というほどのものではありませんが、妻、小6と小3の息子たちと一緒に、車に自転車を載せていろいろなイベントに出かけることが多くなりました。

一昨年、毎年5月に開催される愛知県知多半島沖にある日間賀島^{ひまかしま}を自転車で周回するイベントに参加したこと

がきっかけです。外周道路を家族で交代しながら2時間周回する「ファミリーチーム」にエントリーするため、15年以上前に購入した私と妻のマウンテンバイクを実家から引っ張り出し、子供たちの自転車もすべて晴れ用のタイヤに交換、ヘルメット、グローブ、積載用のキャリアも購入して参加しました。しかし、あいにくの雨。その後も、名古屋市の外れにある近所の公園から名古屋城の内堀近くを經由して栄のテレビ塔を目指して走る「自転車散歩」、昨年の日間賀島に参加しましたが、ともに土砂降り。「我が家には雨男(女)がいるのでは?」と思わざるを得ない状況が続きました。

しかしそれも昨年8月、長野県にある開田高原を散策する「自転車散歩」でようやく晴れたのです。おかげで翌日行われた、きそふくしまスキー場でのスラローム・ダウンヒルにも参加することができました。参加人数が少なく、スタート地点付近までは小型トラックの荷台に自転車と一緒に乗って上るといった、草レースのような大会でした。初めて本格的なダートを走る息子たちは、練習走行～予選～決勝と何度も走ることができ、途中派手に転んでへこんでしまう場面もありましたが、1位、3位という成績で（小学生の部の参加者は3名）、賞状、賞品もいただき大満足でした。

3回目の参加となった今年の日間賀島も晴れとなり、初めて素晴らしい景色を見ながら走ることができました。「おかあさん、ママチャリの人に追い付けなかった～」と楽しみながら競争することもできました。

お盆には京都にある重要文化財、石清水八幡宮境内の山麓でダウンヒルレースが開催されましたが、気が付いた時にはエントリーが締め切られており、残念ながら参加することができませんでした。その代わりに(?)、犬山市にある国宝犬山城近くの妻の祖母の家まで走ろうかと計画中です。

くすりの散歩道

NO.39

“さるすべり”と 太宰 治

JAPIC評議員

(前) 順天堂大学浦安病院 小清水 敏昌 (Koshimizu Toshimasa)

私が同じ三鷹市内から現在の家(下連雀)に移り住んで、約7年になる。我家の近くに、「井心亭 せいしんてい」といって、昭和58年に三鷹の旧家が土地を市に提供し、市が和風文化施設として数奇屋造りにした素朴な純日本風の屋敷がある。畳の部屋が茶室を含み大小4室あり庭園を入れると敷地面積が約770㎡である。いつも、お茶会、お花の会、歌会、落語会などが行われており、特に春や秋には和服姿の女性達をよく見かける。

井心亭の通りは三鷹の文化的散歩コースになっていて、時々メモを片手に何人かのグループが歩いている。この屋敷の通りに面したところに1本のさるすべりの木があり、夏ともなるとピンク色の花が咲き、通る人たちを和ませている。さるすべりは典型的な夏の花木の一つであり、特に今年は猛暑のため、この花が生き生きと咲いているように見える。この木に小さな解説板が付いており、「太宰治ゆかりのさるすべり」とある。

太宰治はこの「井心亭」の向かいの家の奥に、ちょうど30歳になった頃の昭和14年9月から住んでいた。当時の住所でいうと東京府北多摩郡三鷹村下連雀である。その太宰の家の玄関先の小さな庭にさるすべりがあり、花を咲かせていたという。現在ではその家はなく路地だけが残っている。彼の小説「おさん」に、このさるすべりを見た夫が「さるすべりは、これは、一年置きに咲くものかしら」とつぶやく描写がある。さるすべりの木は樹皮がはげやすく表面がツルツルしているので猿も滑ってしまうという意味で名付けられた由。一方で、さるすべりは百日紅ひゃくじつこうとも言い、開化時期が長いことから命名されたとも。花の色はピンクのほかに、白、赤、紫もある。

太宰が死んだのは昭和23年6月のことで、近くを流れる玉川上水に女性とともに身を投げ自殺した。その後、太宰宅の庭にあったこのさるすべりは、昭和63年に、「井心亭」が開設された際にその庭先に移植された。「太宰治ゆかりの」とある所以である。

三鷹での執筆活動は精力的で、主な作品に「走れメロス」「駆け込み訴え」「きりぎりす」「東京八景」「帰去来」そして有名な「斜陽」「人間失格」などがある。それらの作品のなかに三鷹での生活を通した人々の話しが出てくる。昨年は太宰治生誕100周年ということもあって、三鷹市では太宰治には市を挙げて力を入れている。例えば、「太宰の足跡を辿る10のサイン」というパンフレット(1部100円)には、太宰の小説に登場する場所や執筆に使っていた場所などを紹介しているし、駅近くにモダンな「太宰治文学サロン」を開設し、太宰の文学を広報している。このサロンの場所は、太宰一家がよく利用し、彼の作品にも登場する「伊勢元酒店」という商店の跡地で、今はビルになっているが、その1階をサロンにしている。

太宰の遺体が発見された6月19日は「桜桃忌」と命名され偲ぶ会になっている。この日には毎年大勢の若者が彼の墓のある三鷹の禅林寺に集まり、ニュースとしてメディアにも取り上げられるほどである。

さるすべりについての薬効は、特に無いようである。その仲間に「大花さるすべり」というインドから東南アジア、オーストラリアの北部に分布している大きな葉のさるすべりがある。フィリピンでは「バナバ(Banaba)」と呼ばれ、葉は煎じて糖尿病や肥満の民間薬として利用されている。わが国ではそのような使い方はない。

「井心亭」で咲いているさるすべりの花を見る度に、同じ木の花を太宰も見ていたかと思うと、感慨深いものがある。



外国政府等の医薬品・医療機器等の 安全性に関する規制措置情報より – (抜粋)

2010年7月1日～7月30日分のJAPIC WEEKLY NEWS (No.261-265)の記事から抜粋

■米FDA

- FDA Safety Notification: 空気またはガス圧調整用スプレー機器の使用時における空気またはガス塞栓のリスク
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/default.htm>>
- Arava (leflunomide) : 粹囲み警告—重度の肝障害リスクについて
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/default.htm>>
- 米FDA、Baxter Healthcare Infusion Pumpの回収要請を発表
<<http://www.fda.gov/NewsEvents/Newsroom/PressAnnouncements/ucm218889.htm>>
- アンジオテンシン受容体遮断剤 (ARBs) : 癌リスクに関する進行中の安全性レビュー
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/default.htm>>
- Medwatch「安全性に関する表示変更 (2010年6月)」: Advair Diskusなど
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/ucm218813.htm>>
- Evamist (estradiol経皮スプレー) のDrug Safety Communication: 局所用estrogenへの小児およびペットの意図しない暴露
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/default.htm>>

■Health Canada

- Canadian Adverse Reaction Newsletter (Volume 20, Issue 3, July 2010) : pregabalin (Lyrica) —自殺念慮と自殺企図など
<http://www.hc-sc.gc.ca/dhp-mps/alt_formats/pdf/medeff/bulletin/carn-bcei_v20n3-eng.pdf>

■英MHRA

- 医療専門家向け医薬品安全性情報 (2010年6月発行分) : Adoport (oral tacrolimus) の投薬過誤のリスクなど
<<http://www.mhra.gov.uk/Safetyinformation/Safetywarningsalertsandrecalls/index.htm>>

■EU・EMA

- Pharmacovigilance Working Party (PhVWP) の月間報告—2010年6月: cisplatin—TPMTおよびCOMTの遺伝子変異を持つ患者における聴器毒性リスク増加など
<http://www.ema.europa.eu/docs/en_GB/document_library/Report/2010/07/WC500094119.pdf>
- European Medicines Agencyのmodafinil使用制限に関する勧告
<http://www.ema.europa.eu/ema/index.jsp?curl=/pages/home/Home_Page.jsp>
- European Medicines Agency、局所用ketoprofenのベネフィット・リスクバランスはポジティブであることを確認
<http://www.ema.europa.eu/ema/index.jsp?curl=/pages/home/Home_Page.jsp>
- European Medicines Agency、WHOレベルIIIスケールの疼痛管理用徐放性経口opioidsのレビューを完了
<http://www.ema.europa.eu/ema/index.jsp?curl=/pages/home/Home_Page.jsp>
- Pharmacovigilance Working Party (PhVWP) の月間報告—2010年7月: 外用または吸入用camphor: 誤飲による中毒リスクなど
<http://www.ema.europa.eu/ema/index.jsp?curl=/pages/home/Home_Page.jsp>

■独BfArM

- 医薬品の安全性に関する報告書—独BfArMおよびPEIからの情報 (2010年6月、Issue 2) : tamoxifenとSSRI (Paroxetin (paroxetine) など) 併用後の乳癌による死亡率上昇; CYP2D6阻害による相互作用など
<http://www.bfarm.de/clin_094/DE/Home/home_node.html>
- Invirase (Saquinavir) に関するRote-Hand Brief: QT延長について
<http://www.bfarm.de/clin_094/DE/Pharmakovigilanz/risikoinfo/rhb_invirase.html>
- WHOステージIIIの経口徐放性Opioid (opioid) 製剤: RL 2001/83/EGのArt. 31下でのリスク評価
<http://www.bfarm.de/clin_094/DE/Home/home_node.html>

■豪TGA

- 2010年季節性3価インフルエンザワクチン接種後の若年小児における熱性反応に関する調査—2010年7月2日時点での状況報告
<<http://www.tga.gov.au/alerts/medicines/flu vaccine-report100702.pdf>>

■ニュージーランドMedsafe

- ニュージーランドMedsafe、小児に対する一部の鎮咳・感冒薬の販売制限の導入日を発表
<<http://www.medsafe.govt.nz/hot/media/2010/CoughandColdJuly2010.asp>>

JAPIC事業部門 医薬文献情報 (海外) 担当

記事詳細およびその他の記事については、JAPIC Daily Mail (有料) もしくはJAPIC WEEKLY NEWS (無料) のサービスをご利用ください (JAPICホームページのサービス紹介: <<http://www.japic.or.jp/service/>> 参照)。JAPIC WEEKLY NEWSサービス提供を御希望の医療機関・大学の方は、事務局業務・渉外担当 (TEL 0120-181-276) までご連絡ください。

【新着資料案内 平成22年7月8日～平成22年7月30日受け入れ】

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。この情報は附属図書館の蔵書検索 (<http://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧頂けます。これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越し下さい。

〈配列は書名のアルファベット順〉

書名	著者名	出版社名	出版年月
平成22年度版薬事法令ハンドブック 薬事法、薬事法施行令、薬事法施行規則		薬事日報社	2010年5月
ICD-10 CD-ROM: International Statistical Classification of Diseases and Health Related Problems. 2008 Edition.		WHO	2010年4月
JAPIC 医療用医薬品集 2011	日本医薬情報センター	日本医薬情報センター	2010年8月
JAPIC 医療用医薬品集 2011 薬剤識別コード一覧	日本医薬情報センター	日本医薬情報センター	2010年8月
耳鼻咽喉科学用語解説集	日本耳鼻咽喉科学会 編	金芳堂	2010年5月
常用新薬集 第41版	日本新薬株式会社 編	日本新薬	2010年7月
科学的根拠に基づく乳癌診療ガイドライン1 薬物療法 構造化抄録・検索式CD-ROM付 2010年版	日本乳癌学会 編	金原出版	2010年6月
先発・代表薬でさがすジェネリック医薬品リスト平成22年6月版	医薬情報研究所	じほう	2010年7月
小児神経学用語集 改訂第3版	日本小児神経学会用語委員会 編	診断と治療社	2010年5月

情報提供一覧

【平成22年8月1日～8月31日提供】

出版物がお手許に届いていない場合、宛先変更の場合は当センター事務局 業務・渉外担当 (TEL 03-5466-1812) までお知らせ下さい。

情報提供一覧	発行日等	JAPIC作成の医薬品情報データベース	更新日
〈出版物・CD-ROM等〉		〈iyakuSearch〉 Free	http://database.japic.or.jp/
1. [JAPIC Pharma Report-海外医薬情報]	8月6日	1. 医薬文献情報	月 1 回
2. [Regulations View Web版] No.196-197	8月13日・27日	2. 学会演題情報	月 1 回
3. [添付文書入手一覧] 2010年8月分 (HP定期更新情報掲載)	8月31日	3. 医療用医薬品添付文書情報	月 2 回
4. [JAPIC NEWS] No.317 9月号	8月27日	4. 一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
5. [添付文書記載病名集 Ver.3.0]	8月31日	5. 臨床試験情報	随 時
6. [JAPIC一般用医薬品集2011]	8月31日	6. 日本の新薬	随 時
〈医薬品安全性情報・感染症情報・速報サービス等〉 (FAX、郵送、電子メール等で提供)		7. 学会開催情報	月 2 回
1. [JAPIC Pharma Report海外医薬情報速報] No.745-748 (旧: 医薬関連情報速報FAXサービス)	毎 週	8. 医薬品類似名称検索	随 時
2. [医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Q サービス)]	毎 週	9. 効能効果の対応標準病名	月 1 回
3. [JAPIC-Q Plusサービス]	毎月第一水曜日	〈iyakuSearchPlus〉	http://database.japic.or.jp/nw/index
4. [外国政府等の医薬品・医療用具の安全性に関する措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)] No.2244-2265	毎 日	1. 医薬文献情報プラス	月 1 回
5. JAPIC Weekly News No.265-268	毎週木曜日	2. 学会演題情報プラス	月 1 回
6. [感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)] No.352-356	毎週月曜日	3. JAPIC Daily Mail DB	毎 日
7. [PubMed代行検索サービス]	毎月第一・三水曜日	4. Regulations View DB (要:ID/PW)	月 2 回
		外部機関から提供しているJAPICデータベース	
		〈JIP e-infoStreamから提供〉	https://e-infostream.com/
		〈JST JDream II から提供〉	http://pr.jst.go.jp/jdream2/

医療用医薬品集2011 〈検索用CD-ROM付〉



■本書の特長

- ◆35年の編集実績による信頼と使いやすさ
- ◆国内流通全医薬品の最新情報に基づき作成
- ◆検索用CD-ROM(非インストール版)付
- ◆便利な「薬剤識別コード一覧」
(冊子。別売2,940円 税込)の無料請求葉書付
- ◆類似薬選定のための「薬効別薬剤分類表」を掲載
- ◆更新情報メールの無料提供(要登録)
- ◆シールタイプの更新情報サービス(有料)

■検索用(非インストール版)CD-ROM Windows版とは

- ◆収録内容

○医療用医薬品集	○薬価情報
○一般用医薬品集	○後発品の全情報
○薬剤識別コード一覧	
○医療用医薬品の最新添付文書画像(PDF)の表示機能付(無料・要インターネット接続。PDFは月2回更新)	

定価: 8,000円(税込)

(※インストール版は15,000円(税込)で別途販売しております。)

13,650円(税込)

B5判/約3,300頁

財団法人 日本医薬情報センター(JAPIC) 編集・発行 TEL 0120-181-276
丸善 出版事業部 発売 TEL 03-3272-0521

上記書籍の他、電子カルテやオーダリングシステムに搭載可能なJAPIC添付文書関連データベース(添付文書データ及び病名データ)の販売も行っております。データの購入希望もしくはお問い合わせはJAPIC (TEL 0120-181-276) まで。

Garden

ガーデン

このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。リフレッシュにどうぞ!!

だつら

このダツラは特別の品種である。1960年ころ、幻覚物質の民俗学研究者石川元助先生が南アメリカから、特に強い作用を有するという株の種を数粒もってきた。ただ一粒が発芽したものである。この成分はアトロピンをほとんど含まず、スコポラミンが主成分であり、医薬原料植物として好都合で生産にも用いられた。ところが、この株は花は咲けども実がつかず、以来、挿し芽で増やしてきたものである。冬越しが難しかったのだが、このごろの暖冬で屋外でも大きな株になる。年に数回、数多くの花が咲く。(ks)



JAPICホームページより
<http://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン

Topページ右下部の「アイコン」からも閲覧できます。